

堀江 淳

西九州大学 講師

地域在住高齢者の閉塞性換気障害が身体機能、歩行能力、生活の質に与える影響についての検討

本研究は、慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者の早期発見を遅延させる要因である「自覚しにくく、気づきにくい」ことに対しエビデンスを提示することを目的とする。

地域在住高齢者 437 名に対し、呼吸機能検査および Body Mass Index、認知機能評価、呼吸筋力評価、脊柱アライメント測定、肢体筋力評価、骨格筋量測定、バランス評価、歩行能力評価、QOL、ADL を評価し、一秒率が 70%未満を気道閉塞群 (A0 群) (n=60)、70%以上を健常群 (n=60) として比較した。

COPD の有病率は 14.7%であった。GOLD による病期は、Ⅰ期 16 名、Ⅱ期 33 名、Ⅲ期 11 名であった。健常群と A0 群の比較では、握力、MIP、MEP、総軌跡長、足趾把持力で A0 群が有意に低値を示し、最速歩行速度、10m 障害物歩行時間では健常群が有意に短かった。6MWT、VAS による QOL は有意差が認められなかった。

呼吸器疾患未診断の早期段階の COPD 患者は、持続的能力には問題がなく、QOL、活動能力においても何ら異常を自覚していないことが客観的に検証された。